

## 直養と春海：縣門江戸派の系譜

亀井，森  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9371>

---

出版情報：語文研究. 88, pp.1-12, 1999-12-25. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 直養と春海

—— 縣門江戸派の系譜 ——

亀井森

## 一 はじめに

西田直養なおかいは小倉藩士。寛政五（一七九三）年生、慶応元（一八六六）没、七十三歳。字浩蔵・浩然。通称庄三郎・亀之助・茂右衛門・直之助。また筱舎・筱廼舎・柳村と号した。小倉藩第六代藩主小笠原忠固の小姓として出府し、後に小倉藩支藩新田藩主篠崎侯の傅、さらに京・大坂の留守居役を仰せつかる。地方の国学者でありながら、三都を往来して中央の学問を取り入れ、北部九州・防長地方に遊んで多くの門人を得た幕末の文人である。

しかし、直養の学統についていまだ確固とした学問系統は示されていない。文久二年刊『国学師名録』（注）では直養を「本居大平門」とし、『国学者伝記集成』でも同様に大平門とするが、直養の大平への入門の記録はなく、現在、それは訂正さ

れている。（注）

また、豊前四日市の医師渡辺明が中島広足に宛てた書翰（注）において、渡辺明は大坂にて面会した直養を「野々口（亀井註―隆正）は平田之奇癖怪説を信奉する人也。西田も近之、浪華には（同―萩原）廣道を第一とす。」（傍線亀井以下同じ）と評している。

このように大平門人とも平田篤胤の「奇癖怪説」を信奉する人物とも認識されていた同時代評は直養の当時の学問的一面を語る上で看過できないものであるが、まず考えられるべき直養の方向性について従来ほとんど触れられてこなかった。それは江戸派との関係である。江戸派は賀茂真淵に教えを受けた村田春海・加藤千蔭が、真淵没後江戸にて自らを正統的な真淵の継承者とし、同じく真淵門人である本居宣長と覇権を争った派閥である。（注）

その江戸派、特に村田春海の高弟に、小倉藩における和

歌・和文の勃興を齎した秋山光彪（安永三年生、天保三年二月六日没、五十八歳）がいる。直養はこの光彪に和歌を学び国学を志す様になったのである。光彪の事蹟がほとんど明らかになっておらず、さらに光彪の著作をもほとんど遺されていないので、従来、江戸派和学の流れと西田直養または小倉藩の文事との連続性の指摘がなされなかった。しかし、直養の種々の著作には、師秋山光彪の師である村田春海への私淑が端々に散見する。本稿は直養の江戸派との学問的な繋がりを見出すことによって、いまだ明かならざる西田直養研究へのひとつの方向性を提示すると同時に、彼の主要な交流圏である北部九州・防長地方に広がる江戸派末流の可能性の一端を見出すことができるのではないかと考えている。以下、漢学・和学・長歌に関する春海と直養との言説を比較し、直養の春海への志向、さらには縣門意識を探っていきみたいと思う。

## 二 漢学についての言説

村田春海が歌人であると同時に漢詩人であったことは周知の事柄である。また、漢学を和学と対等に位置付けており、自らの儒者観（注）というべきものを『和学大概』で次の様に述べている。

和学といふ事、いにしへは別に一家の学ならず、皆儒生

のかね通じたりしことなり（中略）我國の儒生は必吾國の国史典故に通ぜずしてはかなはざる事なるを、当世は学問の道草莽にのみあれば、儒者皆曲稽の士の如くになりて、儒者の任は只漢土の書に通ずるを、己が業とのみこころえて、吾國の事は其業の外の事のやうにおもひたるは、学問の本意を失へるものなり。

本来、儒者は、漢学は勿論、国史典故にも精通しているべきである。にもかかわらず、現在の儒者は漢学にのみ拘泥して他を顧みないのは学問の本意を失っていると春海は嘆いている。しかし、春海のこの言の裏には、和学者のあるべき姿が投射されている。それは和学理解の為に和学者も漢学に通じていなければならないということである。

同時代の漢学に対する言説として、本居宣長は漢学に対して『玉勝間』「もろこしぶみをもよむべき事」で次のように述べる。

から國の書をも、いとまのひまには、ずるぶんに見るぞよき。漢籍も見ざれば、其外國のふりのあしき事もしられず。又古書はみな漢文もて書たれば、かの國ぶりの文もしらでは、学問もことにゆきがたければ也。かの國ぶりの、よろづにあしきことをよくさとりて、皇國だましひだにつよくして、うごかざれば、よるひるからぶみを見て、心はまよふことなし。然れども、かの國ぶりとして、人の心さかしく、何事をも理をつくしたるやうに、

こまかに論ひ、よさまに説なせる故に、それを見れば、かしき人も、おのづから心うつりやすく、まどひやすきならひなれば、から書見むには、つねに此ことをわするまじきなり。」

宣長にとって漢籍を読むことは、まず第一に「外国のふりのあしき事」を知る為であるとする。

では、西田直養にとって漢学はどのようなものであったのであろうか。天保十三年刊の『當時現在廣益諸家人名録』二編(注)において直養は「儒道学」と評価されている。その他の儒学の分類が「儒古学」「儒折衷学」であることから、「道学」者すなわち朱子学者としての分類である。儒者として認識されていた直養は、自らの和学論にその漢学重視の傾向を反映させ、自身の随筆を収めた『笈舍漫筆』(注)巻二「学文」で次の様に述べる。

学文といへばみな漢学のやうにおぼえたれど、わが皇国にうまれて、わがいにしへのことをしらず。たゞに他の国の事をのみ心がくるは、大なるひがことなり。さてわがくにのことをしらんと欲しても、漢学せざれば和書もよめず、和学もいできざれば、漢学はつとめてすべきなり。和学者の漢学しらざるは、またせまくして危し。漢学者の倭学なきは、狭く危きは勿論、わが系図をしらで、隣家の系図をばそらんずるが如し。(中略)先最初に漢学をいたし、夫より古言をおぼえ、国学をしたらむは誠に

よかるべし。その古言といふも国学の中にあり。

そこには、春海が『和学大概』で述べていた、漢学をも兼ね備えた理想的な和学者像が描かれている。学問的方向性を同じくする直養にとって、春海は評価すべき先達であったと思われ、直養が漢文体を基礎にして和文を自在に操る春海の才を評価した次の言がある。

織錦翁の手ぶりよりまた変じて漢文体にて皇国の詞をあやなすといふことになれり。この翁よりまへにかゝる姿たえてなきにはあらねど文法の格さだまりて世にうまくあやめおりいだされしはにしごりの翁也けり

(国立国会図書館蔵『直養漫筆』)

このような漢学に対する春海と直養の方向性の近似は漢学に留まらない。それは和学に対する直養の言説によって明らかとなるのである。次節に直養と春海の和学に対するそれぞれの言説を比較していくことにする。

### 三 和学についての言説

西田直養の初期の和学論として、秋山光彪に入門した頃に執筆したと思われる「学論」がある。未定稿であったが、直養が自らの随筆『柳村筆記』(注)巻四「皇国学のまなび方」の中に再録している。

おのれ二十歳斗(亀井註―文化十年前後)にてはじめて

皇国まなびに志し学論といへるをかけり。まだしきほどのわざなれば、いと文章も拙く意とほらぬ事もあれど、そがまゝあらためずしるしぬ。

世にから学する人のあるは経義家あるは文章家あるは子類家などゝくきくゝのわかちありて其道学べる如く皇国まなびするもまたしかり。かれおのれ四しな分をつけて考るにまづ古言歴史制度詞章この四のものにいでず。(中略) (亀井註—この四科に習熟すれば) おほよその人といへどもあに縣門の余燼ふたゝびおこらざるべけんや。かならずゝ、おもひくづをるゝことなかれ(以下割書) 其後村田翁ノ和学大概とふものを見しに同案なり

直養はこの「学論」の中で、皇国学の四本の柱として古言・歴史・制度・詞章を挙げ、この四科の学問に習熟することによって、消えかけた縣門の火に勢いを再び取り戻すことができる<sup>(注1)</sup>と説いている。直養が「学論」を著した文化十年頃には、真淵の跡を受け継いだ千蔭と春海は既に没<sup>(注2)</sup>しており、この直養の「縣門の余燼」の言も当を得た状況分析というべきだろう。

直養と春海を結び付けるものとして、ここで注目されるのは文末に割書で施された、「其後村田翁ノ和学大概とふものを見しに同案なり」の一文である。『和学大概』<sup>(注3)</sup>では、学ぶべき科目として次の様に述べている。

今和学をとりたてんとするには、先三科ばかりに分かつ

べきにや、先第一に国史実録の学を一科とし、次に、律令典故の学を一科とし、次に、古言を解釈する学を一科とすべし。和学をなすには、この古言にくらくては、餘の二科も通じがたき事多し

春海は国史実録、律令典故、古言の三科を挙げる。中でも古言を解釈する学は他の二科の理解の基礎となるべきもので、古言を知る為にはとて次の様に述べている。

此古言をしらんとするには、古事記、日本紀、万葉、祝詞、宣命等をよく読にあらざしては知がたし。しかのみならず、後世の歌集、日記、物語の類をも広くよみて、古今を照らして考べし。

古言を解釈する学の手段として和歌や日記、物語を読むべきであるとするが、これは直養がその「学論」の中で、四科のうちの一つ、「詞章」の定義を示した條で述べる、

物語草紙紀行日記などをよくしり言葉のてにをはや、またはうたのしらべの高下、仮名づかひのことなどをしてるを詞章の学といふべし。

に合致する。また、『笹舎漫筆』巻二「学文」では、  
和学はまへにもいへる如く三品あり。まづ古言の学、歴史の学、制度の学是なり。

と詞章を古言に含めて春海と同様に三科にまとめている。

本居宣長が国学を、神学・有職・歴史・歌学の四つに分類し、神典研究を独立させて「古の道」の究明に情熱を注いで

いたことなどを考え合わせると、直養と春海の和学論には近似性がうかがえる。

直養は同様な和学観を持つ春海に対して、和学者として高く評価している。『笹舎漫筆』巻二「学文」の中で国学者を評して次の様に述べる。

国学をせむとおもは、歌や文などは捨置べし。歌よみ文かきにならんとおもは、国学はまたならず、両方かねたるものは、みづとりのかものおきななり。鈴屋の大人は国学に長じ、春海は歌に長ず。しかしまた学もなきにしもあらず。千蔭は只の歌人にて、学一向になし。いまの濱臣は、国学はよけれども、歌はわるし。両方はむつかしきものなり。

卓越した和学者は、詠歌と国学を兼ね備えているものである。その条件を満たしている人物はまず真淵、次に、宣長ではなく春海を位置付けている。直養は春海の和歌を認めているだけではなく、自らの詠歌においても春海の歌風を志向していたと思われる、それを示す次のようなエピソードが遺っている。天保八年十一月十五日、直養が村田春海の養女多勢子を訪問した時のことである。

十五日、地藏橋なる多勢子ぬしをとふ。廿年もむかしは月並の會に出たりしが、其時とはやうかはり、ぬしも尼となり、芳樹といふをとつとし少林院の賀茂翁忌日の會にあひたりし時は、髪はそらざりしを、ゆくりなくて

見たがへたり。何くれと物語す。いまの歌の風、故翁（亀井註「春海」）の時とはいたくたがひしとて歎息也。いま木村（注五）より外に誠の歌よめる人なしとの論あり。てにをは学になづみて、歌くゝられて、優なる風なしとて、当時の歌人たちのことをば、心にはなぬやうなり。おのれ途中にてよみたりし初雪の歌の再案して、尼公へ示しければ、いたくよろこび、これなむ錦織の風なりとて、やがて短冊をいだしこはれればかきつ。そのうた、ふりそむるゆきにつけてもみつるかなとしにまれなる人のあとをもといふ歌なり。

〔「笹舎漫筆」巻八所収「村田多勢子を訪ふ」〕  
多勢子は、安永六年生、弘化四年十二月十二日没、七十一歳。江戸の儒家渡辺玄六の女。村田春海の養女となり、春海より国学・歌道を学んで上達し、子弟の教授に当たる一方、諸侯の奥向に出入りして歌学を講義した。春海が文化八年に没した後、錦織舎をよく守り、江戸派末流の中心的存在となつた人物である。

天保八年十一月十五日に面会を果した多勢子は直養に嘆息して曰く、今の歌風は廃れ、父春海が存命の頃の歌風とは全く異なつてしまった。いまでは木村定良以外に縣門正統の歌を詠める者がいなくなつた。そして、近頃の歌は文法に影響を受け、優なる歌風ではなくなつてしまったと。そこで直養が「ふりそむるゆきにつけてもみつるかなとしにまれなる人

のあとをも」という初雪の歌を示すと、多勢子はこれこそまさに春海の歌風と激賞し、短冊に書かせたのである。春海を真淵の次に位置付けている直養にとって、自歌を春海の養女多勢子に誉められたことはこの上ない喜びであったにちがいない。しかし、直養がこのエピソードを『笹舎漫筆』に収めた意識に注意する必要がある。これはもちろん単なる自身の詠歌の自慢話とも受け取れるが、直養の春海の歌風への志向、あるいは自らを江戸派の流れの上に位置付けようとする意識の表出とも取れるのではないだろうか。

さらに、直養の春海への志向を指摘し得るものに長歌がある。真淵によって再評価された長歌は縣門の中では特別な意識をもって受け継がれており、直養の、春海に対する意識、あるいは縣門に対する意識をうかがう上で触れておかなければならない問題である。直養は先にみた漢学・和学と同様に春海の長歌を評価し、また長歌に対する言説も春海と軌を一にしているのである。そこで次節において春海と直養のそれぞれの長歌に対する言説を見ていくことにする。

#### 四 長歌に対する言説

賀茂真淵は、『万葉集』を重視し、それまで見過ごされてきた長歌の再評価を提唱する。そして長歌を短歌の不足を補う働きをすると位置付けた。しかし、未だ論というべきもので

はなく、のちに広がりをもせる長歌研究の萌芽を垣間見せるのみであった。すなわち賀茂真淵は、『にひまなび』の中で次の様に述べる。

長歌こそ多くつゞけならふべきなれ。こは古事記日本紀にも多かれど、くさぐさの体を挙げたるは万葉也。そのくさぐさを見てまねふべし。短歌はたゞ心高く、しらべゆたけきを貴めば、言も撰まてはかなはず。長歌はさまざまなる中に強くふるく雅たるをよしとす。よりて言もそれにつけたるを用ゐ、短歌にはひなびて聞ゆるも是に用ゐて中／＼にふるくおもしろき有。さていにしへは思ふ事多き時は長歌をよめり。又短歌も数多くいひて心をはたせしも有。後の人は多くの事を短歌ひとつにいひ入めれば、ちいさき毬袋にも多くこめたらむ如くしてこゝろいやしく調へも歌のことくもあらずなり行ぬ。  
(中略) 万葉の長歌をむかへて古言をしり且人まるその外の長歌の巧み或はのべつゝめたる言の体など文にことならず。

短歌が主流となって久しい和歌において、『万葉集』で盛んに行われていた長歌の再生を願う事はまさしく真淵国学の復古精神に直結する悲願であったのである。

このように長歌の再評価の先鞭をつけた真淵の功績を直養は次の様に称える。

かく代々にしたがひて、(亀井註―長歌の)すがたのかは

りにくたるを、宝曆の頃より、また詞をば八九百年の延喜のみさかりにとり、こゝろをば千年三千年のいにしへにたちかへり、武夫ぶりのこはくしきにもすぎず、をみなぶりのよはくしきにもながれずして、まことに歌の中すみえられたるは、みづとりのかもの翁なりけり。

〔筱舎漫筆〕卷一「長歌五変」  
真淵の長歌復興の願いは、自らを縣居門の正統の繼承者として自負していた春海にも当然受け継がれることとなる。さらに春海は長歌論こそ真淵の歌論の柱だと考えていたようである。<sup>(注16)</sup>受け継がれた長歌再生の願いは、春海の歌論「歌がたり」において、次の様に述べられている。

今深くおもふに、みじか歌はいにしへより世々にすぐれたるうた人も多く出て、めづらかなるたくみ、おもしろきふしもいひつくしたれば、今はいかにおもひはかりても、みないにしへ人の跡のみふまでは、えあらぬわざにて、あたらしいひ出むふしはかたかるべし。たゞ長うたは、古今集のころよりこなたには、こをむねとよめる人もなく、ことなるふしいひ出たるひともなく、世々に歌数もすくなければ、いにしへの人のおもひのこせるたくみも、いひもらせるふしもおほかるべし。かくゞだりたる世にして、めづらかにあらたなる事をひとふしよみいで、いにしへ人にもはづかしきわざをなしえてむものは、たゞ長歌なり。今より後の世に詞のはやしに遊

びて、この道に才かしくからむ人は、こゝに心をふかめむ事こそあらまほしけれ。

春海に受け継がれた長歌再生とその普及の願いは、門人清水浜臣編『近葉菅根集』<sup>(注17)</sup>（文化十二年刊）として繼承される。初学者の長歌詠出の参考に供するために、近世の古学者下河辺長流・契沖より真淵およびその門人までの四十八人の詠歌から長歌ばかり三〇四首を輯録したものである。田中康二氏も述べているように、<sup>(注18)</sup>春海の「歌がたり」、浜臣の『近葉菅根集』ともに初学者への詠歌の助けを旨としており、長歌普及の遺志が確実に受け継がれていることがうかがえる。つまり、長歌は真淵から春海、春海から浜臣へと縣門江戸派の中で特別な意識をもって繼承されたのである。

では、直養はこの縣門の長歌についてどのような評価を与えていたのだろうか。直養の真淵の長歌への賛辞は先に見た通りであるが、春海や他の縣居門人に対しては次の様に述べる。

翁（龜井註―村田春海）の吉野の宮の跡の歌に、大宮のその跡所みればかなしも 木曾の山の歌に いはまくも ゆゝしきかもよ 木曾の高ねは とむすばれたる歌の姿 おのづから格調たかくして貴きやうなり。（中略）菅根集なる縣居のをしへ子の歌にも、七五七五となりたる長歌 おほし。そのうちのひとつをあげていはむ。（中略）縣門の人々の歌にすら、かゝる本意をうしなへるありて、（中

略)かれ七五と聞えもゆかんとおもふときは、はや／＼句勢に心もちひ、五七とゝりなほすべし。是長歌の要なり。

〔筱舎漫筆〕卷一「万葉集歌格」

ここに直養の長歌における縣門評価が顯れている。春海の長歌を評価し、他の縣門歌人の長歌については調べが七五調になつてしまひ長歌の格調を失つてゐるものもあると述べている。先に見た直養の国学者評を重ね合わせると、直養は眞淵・春海を国学・和歌(長歌)ともに兼ね備へた先達とし、他の縣居門人を「縣門の余燼」として積極的な評価を与えていないことが明確に看取できる。さらに具体的に春海と直養との長歌に対する言説を比較すると、漢学・和学と同様にその方向性が似ていることに気付かされるのである。村田春海は長歌において歌論のみならず、実作においてもそれを得意としていた。門人沢近嶺の「春夢独談」に次の様な春海の言葉がある。

我身まかりてのち歌の集などえらぶことあらば、歌はえらびにえらびてかつ／＼に残しねかし。長歌・文章は才のかぎりつくせるなれば、残さずつたへてよとの給ひけり。

短歌よりも文章と長歌に自身を持ってゐたことを示すものであるが、直養自身も短歌よりは長歌の方を得意としていた様で、筑波大学附属図書館蔵『直養集』(19)奥書に次の様に述べている。

こはおのが卅才より五十才までの作のうちよりえり出したるを、長歌・文章にくらぶれば短歌の教すくなきは、ことに短歌に短かければなりけり。

天保十四年癸卯正月十五日 さゝのや主人

『直養集』の歌数は、短歌百首、長歌六十首、文章四十篇であり、直養の文事における長歌の比重の高さがうかがえる。春海、直養ともに長歌に長じていたが、長歌観においても同じ傾向を示している。漢学と和学とを対等に位置付けていた春海は次の様に述べる。

からも大和も、歌はまたく同じものにて、大かたは其おもむきことなることなし。(中略)たゞ萬葉にのりたる長歌こそ、唐の歌行によく似たる物なれ。

〔錦織斎隨筆〕「から大和の歌のけぢめ」さらに春海の歌文集『琴後集』の葛西因是序(文化七年九月)には、

和歌は詩也。短歌は絶句の類也。長歌は歌行の類也。六義既に備はり、抑揚頓挫亦詩の如く然り。(原漢文)

ともある。一方、直養には『万葉集』の長歌を歌格別に分類した『万葉長歌格』という長歌研究書がある。いくつか現存する稿本の内一つ、御茶ノ水図書館竹柏園文庫蔵『万葉長歌格』再稿本の冒頭で次の様に述べている。

萬葉集中の長歌を、こまかに見もてゆくにことさらに昔より句法格調のさだまりしものにはあらざれども、自ら

七種にわかれたり、まづ試に其体裁を類聚し見るに、重起輕結 重起巧結 序起輕結 序起巧結 輕起輕結 輕起巧結 承初結末

惣じて長歌のさまを見るに詩の律体によく似たり。(中略) 文詞とちがひて聯句を省きすることは、詩の對句を去がごとく(後略)

長歌が詩の律体に近似しているとし、長歌の聯句を詩の對句と同格に位置付けている。このように春海と直養は長歌に對する位置付けが同様であり、直養の春海の長歌への積極的な評価も首肯できる。

以上、漢学・和学・長歌という三つの視座から春海と直養の言説を比較してきたが、明らかに直養は學問において村田春海の存在を意識していると言えるのではないだろうか。秋山光彪によって齎された江戸和学・江戸派の歌風の流れは確實に直養へと受け継がれているのである。その村田春海が秋山光彪・西田直養をはじめとする幕末の小倉藩の文事において特別な存在であったことを示す石碑が小倉に現存する。次に、直養の生地小倉で行われた光彪を主導とする顕彰活動を取り上げ、直養の縣門意識を培った小倉藩における縣門の素地について探ることにする。

## 五 小倉における春海顕彰

小倉藩の近世後期の文事において、秋山光彪の齎した和歌歌文の素地は、西田直養のみならず他の小倉藩士の文事に少なからず影響を及ぼしている。その光彪の師である村田春海を顕彰する活動のひとつとして、文政十年(一八二七)二月十三日、村田春海の十七回忌に光彪が文を草して直養が清書した「奉鎮錦織翁奇魂」がある。この「奉鎮錦織翁奇魂」は、現在、小倉南区足立山山麓の妙見神社に「歌塚」として現存する。

### 奉鎮錦織翁奇魂

言卷も恐き皇御国の国風の年経る随に有ぬる體に移ひぬる事を慷慨て縣居大人の普く論し廣く導れしを我翁又其教を守らひて能傳へ能示し給しかば此豊国にして歌学為人も漸其正き筋を辨ぬる事とは成にたり。故翁を慕ひ尊び合へる人人と相議て其幸魂の奇魂を迎奉鎮奉て二月の十三日を毎年に斎奉称奉の辰と定め此処に詣来此処に集ひて彌益益此国風の常磐に堅磐に栄行む事を仰乞禱む事の由を秋山光彪恐みも誌置になも有ける

文政十年二月十三日

西田直養書

(原文は万葉仮名)

賀茂真淵翁によってひろまった国学を受け継いだ春海翁が

さらに私達豊前の国で和歌を学ぶものによく伝え、教え諭していたので、私達は正しい真淵翁の教えを得ることが出来るのだと述べられている。ここで光彪は春海が小倉藩の文事に果した役割、さらに小倉藩における国学が真淵・春海という縣門の流れを受けて継いでいるのだと明確に宣言しているのである。当時、三十五歳であった直養も次のような春海顕彰・追慕の長歌を詠んでいる。

「春海翁の十七回忌に足立山に碑たてける時に」  
さるかた 錦織をぢの うまごりの ことばのあやを  
わが大人の うつつたへて ひと皆に 示されしより  
うき時も かなしきをりも おのがじ、 おもふおもひ  
を 経緯に おりもいづめり いかでその 大きみふや  
う むくひてむ わざしもがもと かくれぬの 下にお  
もふを 大人も、 みやびのともと さちのやの さち  
あらざむと にしごりの やどの翁の くしみたま  
はひしづむと 足立山 しもと かりそに 碑をたてた  
まひ そのゆへを しるしたまひて 直養に 筆とらせ  
られ もろびとも つどひまる来て 奇魂の くすしき  
までに 幸魂 さきはへませど うなるつき たびのむ  
はふを 桜花 心ありける 峰麓 おりゐる雲と わす  
れては みまがふばかり さきにけらしも

〔笹舎全集〕〔長歌 卷乾〕所収

これらの文、長歌から直養をはじめとする光彪門人達が、

師の師として村田春海を慕い、光彪の教えを真淵直系の歌学として信奉していた彼らの意識を垣間見ることが出来るのである。

## 六 おわりに

村田春海は真淵直系の学問を近世後期の小倉藩士に齎し、幕末小倉藩の和歌・国学を語る上では欠かす事のできない存在である。また春海の高弟、小倉藩士秋山光彪は、その村田春海と小倉藩との橋渡しの役割を果し、西田直養らの門人に縣門の学問を伝えていく。その意味において小倉藩の国学における秋山光彪の存在は非常に大きい。つまり西田直養が秋山光彪に入門した時には既に小倉藩の国学における縣門の素地は整っていたのである。それに加えて国学者西田直養は、自らの学問が深まるにつれ、漢学、国学者像、和学、長歌のいづれにおいても、その方向性の先にある村田春海の存在に気付いていったのではないだろうか。その結果、直養の積極的な春海評価、また自身が真淵・春海・光彪と続く縣門の流れを受け継いでいるという縣門意識へ繋がっていったのである。その縣門意識の顕れとして「学論」の文末の一文を再度引用する。

〔亀井註―古言歴史制度詞章の四科に習熟すれば〕おほよその人といへどもあに縣門の余燼ふたゝびおこらざる

べけんや。かならず、おもひくづをるゝことなかれ  
ここには、自身を含めた縣居門人への決意や激励が表明され  
ていたのである。冒頭に述べたように、西田直養は幕末の  
小倉藩における文筆を担った人物ながら明確な学問系統が示  
されていない。数少ない断片的な研究でさえ、直養の趣味  
や金石研究、奇癖怪説を取り上げるといふものであった。  
ここにおいて西田直養の縣門江戸派への志向を指摘したこと  
は、今後、研究の進展が予想される縣門江戸派末流の国学者  
研究、あるいは北部九州・防長地方に広がる直養の門人達の  
学問を考える上で一つの指針を与えることができるのではな  
いかと考えている。

注1 源政柱編。巻頭に「古学道統図」として国学者の学統を图示  
している。直養は長澤伴雄、飯田秀雄、衣川広海、中山美石  
らとともに大平門に組込まれている。

2 國學院大學日本文化研究所編『和学者総覧』（平成二年）で  
は、「正誤表」によって学統の箇所の「本居大平」を削除する  
ように指示されている。

3 高階惟冒編『国学人物志』初編（安政六年序刊）には、豊前  
国の部に「明 四日市 渡邊修斎」とあり、渡邊重名・重春  
とは別項である。

4 弘化四年八月七日付。彌富濱雄編『名家書翰集抄』（大正七年  
刊。歌文珍書保存會）所収。

5 弘化四年六月十六日、豊前四日市の医師渡辺明が直養を訪問  
している。（『笹舎漫筆』巻十二「信濃国大地震中一奇談」）

6 当時の野々口隆正の評判は他の国学者仲間では芳しくなく、  
天保十三年に彼が発表した「棚雲考」（『嚶々筆語』所収）に  
対して、東条義門は天保十四年四月十二日付伴信友宛書簡  
（大鹿久義編著『伴信友來翰集』所収）の中で「嚶々筆話の  
あの棚雲考よ、諸國の笑具となれる事なるに」とあり、また、  
長沢伴雄の信友宛書簡（大鹿編前掲書所収）には「隆正、し  
きり二棚雲考を主張いたし、この比ハ古事記と左伝とを調合  
して講釈をいたし居候より、をりく人伝に承り候度に、嘔  
吐を催ふし候。」とある。

7 揖妻高「江戸派の成立―新古典主義歌論の位相―」（『江戸詩  
歌論』所収 一九九八年二月刊 汲古書院）  
8 『京都名家墳墓録』には、  
秋山福堂墓

常寂光寺。二尊院南隣本堂と妙見堂との間より山に登る  
定家卿の旧跡しぐれ亭に通ずる道なり、福堂墓は二重塔  
の東、下段に位し、西面す。（中略）福堂秋山大人之墓、  
碑陰に

先生諱光彪、字士彌、梨園福堂皆其号也。通称庄兵衛、  
我小倉人、本姓原氏、出繼秋山氏、世仕于國候、先生為  
人廉潔方正、簡練時務、学涉和漢、尤長和歌、嘗受業於  
平春海翁、翁之弟子不下数百人、而辞藻学識無出于先生  
之右者、先生少登仕途身在、君側竭心推誠、夙夜勤勞者  
数十年矣、中歳出就間官、於是徒遊者日益衆矣、先生秀  
挺聳立□稜殊銳、而好誘掖後進、盖其風流出于天性者也  
文政己丑秋再起、為京師邸監、名声日益顯、□壬辰二月  
六日病卒于邸中、年五十有八、葬于嵯峨常寂寺、先生無  
子、有二女、其一早亡、曾養原氏之季為子、以女配之、

- 孫二人、長光訓乃承先生之後者、銘曰、筆舌所奮、風雷  
 為忙、生愛文藻、死在帝卿、一坏之士、草木皆香、此先  
 生道骨所藏。同藩葉山元齋撰孫光訓謹建  
 とある。これによって文政己丑(十二)年に京留守居役に転  
 じ、天保三年二月六日(『小倉市誌』下巻「秋山光彪」項では  
 二月七日とする)に卒したことがわかる。葉山元齋は未詳。  
 揖斐高「漢詩人としての村田春海」(『江戸詩歌論』所収 一  
 九九八年二月刊 汲古書院)  
 七丁ウ「二部」に「儒道学 筱舎 名直養字浩然 篠崎藩  
 麻布日ヶ窪 西田正三郎」とある。しかし、以後、国学者や  
 歌人として認識されたらしく弘化二年序跋『新撰浪華名流  
 記』(無刊記)では「和歌の部」に、嘉永元年序『浪華當時人  
 名録』(無刊記)では「国学及和歌」に分類されている。  
 国会図書館蔵。写本。二十巻七冊。  
 写本大本五巻五冊。国立国会図書館蔵。「柳村」は直養の号。  
 序文は大城戸茂林(未詳。天保七年の大和紀行の同行者)に  
 よる天保五年の序を持つ。また、『舎舎漫筆』と重複する項目  
 が数項ある。  
 加藤千蔭は文化五年九月二日、村田春海は文化八年二月十三  
 日にそれぞれ没している。  
 一冊。寛政四年(一七九二)成。『錦織舎隨筆』の一章を成す  
 が、独立して伝わる。  
 木村定良。安永五(一七七六)年生、弘化三(一八四六)年  
 没、七十一歳。幕府の御先手与力を勤め、公務之余、加藤千  
 蔭の門に入り、国学を学び和歌に精進した。詠歌は近世三百  
 人一首・鴨川集・千船集などに見え、家集に『檀園和歌集』  
 がある。文化十三(一八一六)年から文政元(一八一八)年

- に、下河辺長流・契沖以降の秀歌を博搜して『類題草野集』  
 十二巻を編纂した。  
 12 田中康二「村田春海長歌変容攷」(『國學院雜誌』第九十七巻  
 第七号 平成八年七月)  
 13 この私撰集は実際に刊行されたのは「近葉」(近世諸家による  
 詠歌)十巻のみであるが、当初、浜臣の目的は古葉(『古事記』  
 『日本書紀』『万葉集』『続日本後紀』等)八巻、中葉(『古今  
 集』以下勅撰和歌集・私撰和歌集・諸百首・諸家集等)七巻、  
 近葉をあわせて計二十五巻に及ぶ「菅根集」を完成させるこ  
 とにあったようである。  
 14 前掲田中論文  
 15 商家・歌人。天明八(一七八八)年生、天保九(一八三八)  
 年没、五十一歳。はじめ龜ヶ崎の杉野翠兄、布川の古田月船  
 らに俳諧を学び、東春卿に漢学・和歌を学ぶ。のち村田春  
 海・清水浜臣・小林歌城・小山田与清に歌文を学ぶ。  
 16 大本三巻一冊。写本。構成は、長沢伴雄ら四人の国学者によ  
 る批評二丁、本文九十四丁(巻上「短歌」一十三丁、巻中「長  
 歌」四十二丁、巻下「文章」四十丁)、自跋半丁、識語半丁、  
 17 計九十六丁。長沢伴雄、義門、萩原広道、鈴木重胤による批  
 点書入が多数存する。  
 18 石川八朗先生架蔵本。写本一冊。  
 (付記) 本稿は、日本学術振興会の研究助成および平成十一年度文  
 部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の  
 一部である。  
 (かめい しん 九州大学大学院博士後期課程)